

1 はじめに

本実践は、学習指導要領生活科編の内容「(7)動植物の飼育・栽培」を主たる内容として構成したものである。本校近隣は、大学や県庁、美術館や博物館、図書館といった魅力ある施設が多い一方で、子どもたちが精一杯体を使って自然を感じたり、遊んだりできる場所が少ない地域でもある。夏ならではの楽しみ方、本実践では、自分たちでつかまえた生きものを飼育するというテーマを掲げて子どもたちと学習したひと月余りを紹介する。



図1 生き物探しをする児童

2 授業の実際について

(1) 生き物たちとの出会い

子どもたちとの会話（授業外）の中で「近くの川で生き物を見つけたよ」「捕まえたよ」という話題があった。生きものの飼育につなげたかったことと、地域の自然のよさに触れさせたいという意図もあり、「生き物をつかまえに行こう」ということになった。子どもたちは、川に入る時こそ怖がる子もいたが、各々が網を持ちながら生き物探しに夢中となっていた。活動する中で「端の方を探すといるよ」「水草ごとすくえばいいよ」等の声があがり、「みてみて、エビをつかまえたよ」「虫かごをもって、そっと入れるよ」等、協同して取り組む姿が随所に見られた。夢中になれる学習材（対象）は、子どもたちの自然な対話を引き出したり、気付きを生み出したりすることを再認識できた瞬間だった。その後、子どもたちは、子ども地川エビやどんこ、ヤゴ、ふなの稚魚、カワニナ等を持ち帰ることができた。

(2) 活動の方向性を話し合う【その1】

学校に戻った後に、生き物をどうするか話し合いをもった。子どもたちの思いとしては、「お家の人に見せたい」「家で育てたい」「学校で育てる」様々であった。教師としては、継続的な生き物とのかかわりをもたせたいという思いがあったが、子どもたちと教師側との折衷案（持ち帰っての飼育可）を提示した。餌やりや住みかづくり等、子どもたちが献身的にお世話する姿を見ることができた。なかには、生き物に名前を付けるなど可愛らしい姿も見られた。同時に生き物を飼うことの難しさも痛感させられる取り組みでもあった。残念ながら死んでしまった生き物を見て、お墓を作ろうという子どもたち。雨の中でも傘をさして、お墓を作りに行く子どもたちの姿も一つの生き物のかかわりなのだと感じた。



図2 生き物を観察する児童

(3) 活動の方向性を話し合う【その2】

ある程度、生き物とのかかわりができ、様々な気付きが蓄積できてきたタイミングで、どんな活動をしていきたいのか話し合いを行った。子どもたちは、自分たちが一生懸命お世話している生き物を見せたい、知らせたいという思いが膨らんでいたため、「1年生に見せたい」という方向性がすぐに決まった。活動をイメージしやすいように、また表現活動につながるように「2の1水ぞくかんをつくろう」という活動のテーマを決めた。

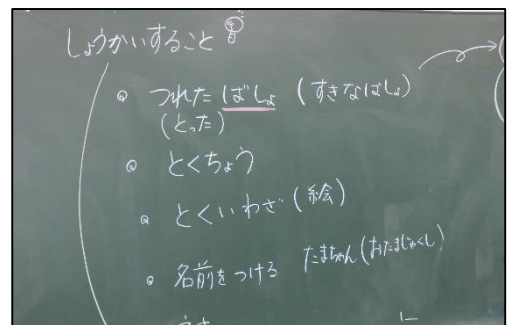


図3 水族館で伝えたいこと

(4) 「2の1水ぞくかん」に向けて

子どもたちに水族館のイメージを問いかけたところ、「魚の説明がしてある」「触ることができるコーナーがある」「えさをあげることができる」「おみやげ屋さんがある」等の返答が返ってきた。その後の話し合い（2の1水ぞくかん会議）の中では、「クイズ作りをしたいな」「実際にさわってもらいたいな」等の思いが膨らんでいた。子どもたちは、それぞれのグループで説明ボードを作ったり、来てくれた人が楽しんでくれるようにアイデアを出し合ったりしていた。あるグループでは、クイズ（かぶと虫の生態に関するもの）作りをする中でグループ内の意見にズレが生じ、活発な意見交換がなされている場面も見られた。このように、子どもたちの思いや願いにそった活動を展開することは、活発な対話を生み出したり、気づきの広がりや深まりを引き出すことにつながっていた。



図4 生き物クイズを作る児童

(5) 「2の1水ぞくかん」開館

「2の1水ぞくかん」本番では、1年生との初めての交流であった。少々緊張した面持ちであったが、たくさんのお客さんに来てほしいとの思いは、子どもたちの行動として現れていた。呼び込みをしたり、実際に生き物を持ちだして、勧誘をしたりするなど事前には考えていなかった工夫をすることができていた。まさに、これまで子どもたちが気付いたり、頑張ってきたことを発揮する場となっていた。活動後の振り返りからは、「たくさんお客さんが来てくれてよかった」「今度はお家の人を呼びたい」「緊張したけど、うまくできたと思う」等、満足感や達成感を味わうことができたようであった。一方で「1年生に触らせすぎたせいで死んじゃった」という振り返りもあった。活動のやり方についても、子どもたちにとって考える機会ができた試みであった。



図5 クイズを出題する児童

3 実践をふりかえって

思いや願いにそった活動は、意欲を喚起し、子どもたちの自然な対話を生み出していた。そのことが新たな気づきを生み出したり、思いを引き出すことにつながっていた。「水族館をつくる」という状況をつくり出すことで、学んだことを表現する必要感が生まれ、相手（1年生）の反応によって活動を修正したりする機会が生まれた。



図6 1年生をブースに誘う児童

ただ、子どもたちの思いや願いをしっかりと汲み取り、学習テーマを設定したりするタイミングや子どもたちの声掛けの仕方に課題が残った。